

## 6. 酪農家における牛ウイルス性下痢・粘膜病の発生と 清浄化に向けた地域包括型対策（第2報）

大分家畜保健衛生所

○志村英明・手島久智・中西年治・病鑑 中出圭祐

【はじめに】昨年管内の搾乳牛130頭規模の酪農家で、診療獣医師から難治性腸炎で予後不良と判断された子牛1頭の病性鑑定依頼があり、牛ウイルス性下痢・粘膜病(BVD-MD)の持続感染牛(PI牛)と診断した。管内では初発であったことから市および酪農組合等の関係機関一体となった防疫対策を取り組んできた。今年度に入り管内酪農家2戸でPI牛の発生が確認された。初発事例は農場内で発生も続き経済的な損失が大きかったが、今年度発生の2戸は初発事例に比しその発生や経済的損失が少ない状況であった。要因として地域や関係機関での一体的な取り組みが効果的な影響を及ぼしていると考えられたので報告する。

【材料及び方法】PI牛の診断はPCR法により1回目の陽性を確認後、3週間後に再検査を行いウイルス分離と合わせて確定した。2019年10月末まで、初発農場は同居牛(n=225)、新生子牛(n=149)並びに農場外預託飼育初妊牛(n=30)血清計404検体、第2発生農場は同居牛(n=361)、新生子牛(n=20)並びに農場外預託飼育牛(n=122)血清計503検体、第3発生農場は同居牛(n=329)、新生子牛(n=42)並びに農場外預託飼育牛(n=6)の血清計377検体を供試した。

【防疫対策】同一農場でBVD-MD発生が相次ぎ関係機関で以下の対策を協議・決定。1. 発生農場のまん延防止対策：[1]同居牛の浸潤状況調査のため家畜伝染病予防法第5条検査の余剰血清を活用し全頭検査。[2]子宮内感染の摘発のため月1回以上の新生子牛検査。[3]農場外で預託飼育された初妊牛のPI牛摘発のため月1回の退牧検査を実施。以上について収束から1年を目途に継続。PI牛淘汰の必要性を説明し農場主に自主淘汰の確認。2. 感染対策：発生3農場とも、BVDVワクチンを未接種であったことから、預託牧場に入牧する牛を中心にワクチンを接種することを指導した。

さらに、続発防止のため管内酪農家に対し以下の取組を強化した。3. 情報提供：定期的に刊行される家保通信を利用し注意喚起を行った。4. 衛生管理指導の徹底：子牛、育成、搾乳等の区域ごとの専用長靴使用や消毒等の衛生管理の徹底を行った。5. 市酪農組合の取組：PI牛摘発のため定期的なバルク乳検査の実施。外部導入や預託など侵入リスクを考慮した検査頻度の設定を行った。

【結果及び考察】各農場のPI牛発生頭数と経済損失は、初発農場は14頭で4,228千円、第2農場は3頭で2,824千円、第3農場は4頭で1,750千円となり、農場内で蔓延が見られた初発農場に比べ農場内での蔓延が確認されていない2、3例目では被害が少なく、初発農場で見られた事故率の増加(8%→29.3%)は確認されなかった。第2農場では3頭とも預託先で、第3農場では4頭目は出生後1月内での摘発を行い、疑いの時点での衛生管理等の徹底や飼養区域の制限を指導し早期PI牛の摘発や農場内蔓延防止の徹底を図った。これまで行ってきた対策はBVD-MD蔓延防止や経済損失の減少に効果があると思われた。今後もこれら取り組みを継続・徹底し、酪農家を守るため関係機関と役割分担し地域一体となった総合的な対応が重要である。